台湾新総統　中国も海峡の安定に尽くせ（5月22日付・読売社説）

新しい中台関係の模索の始まりである。台湾・国民党の馬英九氏が総統に就任した。8年ぶりの政権交代だ。

馬総統は就任演説で、中国と早期の関係改善を目指すと同時に、台湾海峡の現状維持を継続すると宣言した。

中国との関係では、「統一せず、独立せず、武力を用いず」の「三つのノー」政策を強調、中国との「和解と不戦」を訴えた。同時に中国の主張する「一つの中国」の内容は、双方が独自に解釈するとの過去の合意を受け入れた。

脱中国一辺倒だった陳水扁・前政権とは大きな違いだが、大陸で結党された国民党の総統として、中国とは「統一せず」と宣言した意味は大きい。

統一でも独立でもない、現状維持を選択する。それが住民の声の最大公約数である点を考慮すれば、当然の判断と言える。

中国も馬政権との対話を開始するに当たっては、こうした台湾の民意を十分に理解し、尊重する態度が重要である。

馬総統には選挙戦中から、中国寄りとの批判があった。それだけに対中関係を巡る考え方をはっきり示すことで、住民の大多数を占める台湾出身者を安心させ、政権発足に当たって、団結心を生み出そうとしたのだろう。

閣僚人事でも、対中政策を扱う大陸委員会の主任委員（閣僚）に、李登輝・元総統を後ろ盾にする独立派政党「台湾団結連盟」の元立法委員（国会議員）を充てた。同じような考え方がうかがえる。

馬総統は李氏を総統就任式に招待しており、李氏の知恵も借りようとしているようだ。

新政権の焦眉（しょうび）の課題は、中国市場を利用した台湾経済のテコ入れだ。近い将来には、中国側との間で、週末の中台チャーター直行便の開設や、中国人観光客の受け入れなどが開始されよう。

四川大地震では、台湾からの義援金の額が、他国・地域と比べてずば抜けて多い。台湾経済界の対中改善への期待が、それだけ大きいということだろう。

馬総統は、台湾海峡の安全保障で、米国との関係強化を訴えた。日本を名指ししなかったが、「理念が通じ合う国家との連携」との表現で関係強化をにじませた。

中国福建省には、台湾を威嚇するためのミサイル約１３００基が配備されている。中国側にこれを撤去する気配はない。

馬政権の登場を契機に、中国も発想を変え、台湾海峡の安定に寄与することをしてもらいたい。

〔2008 年 5 月 22 日 01 時 44 分　読売新聞〕